

知って
おきたい

Fantastic!
ファンタスティック!
漢詩ワールド

日本の 漢詩

宇野直人

第八回

涙の手まり唄

良寛



一たび思ふ少年の時
書を読んで空堂に在り
燈火数々油を添へ
未だ厭はず冬夜の長きを

〔冬夜長し三首〕其の三

少年父を捨てて他国に奔る
辛苦虎を描いて猫も成らず
箇中の意志人尙し問はば
只だ是れ従来栄蔵生

〔阿部氏の宅即時〕

雑詩 其二十七

家有猫与鼠
同是一蒙皮
猫飽膝上睡
鼠飢夜中馳
猫兒有何能
捉生一曷奇
鼠子有何失
穿器也可悲
器穿可再修
逝者不復帰
尙較罪轻重
秤可傾猫兒

雑詩 其の二十七

家に猫と鼠と有り
同に是れ一に皮を蒙る
猫は飽いて膝上に睡り
鼠は飢えて夜中に馳す
猫兒何の能か有る
生を捉ふること一に曷ぞ奇なる
鼠子何の失か有る
器を穿つ也悲しむ可し
器は穿たるとも再び修む可し
逝く者は復た帰らず
尙し罪の轻重を較ぶれば
秤は猫兒に傾く可し

良寛

五言古詩

雜詩 其七十九

青陽二月初

物色稍新鮮

此時持鉢盂

得得游市廛

兒童忽見我

欣然相將來

要我寺門前

携我步遲遲

放盂白石上

掛囊綠樹枝

于此鬪百草

于此打毬子

我打渠且歌

我歌彼打之

打去又打來

不知時刻移

行人顧我咲

因何其如斯

低頭不応伊

道得也何似

要箇知中意

元來祇這是

雜詩 其の七十九

青陽二月初め

物色 稍く新鮮

此の時 鉢盂を持し

得得として市廛に遊ぶ

兒童 忽ち我を見

欣然として 相將ゐて来る

我を要つ 寺門の前

我を携へて 歩み遲遲たり

盂を白石の上に放ち

囊を緑樹の枝に掛く

此に于て 百草を鬪はし

此に于て 毬子を打つ

我打てば 渠且つ歌ひ

我歌へば 彼之を打つ

打ち去り 又打ち來つて

時刻の移るを知らず

行人 我を顧みて笑ひ

何に因つてか 其れ斯の如くなる

頭を低れて 伊に應へず

道ひ得るも 也 何ぞ似ん

箇中の意を知らんと 要むるも

元來 祇だ 這れ是れのみ

良寛

五言古詩

雜詩 其二十五

余郷有一女

韶年美容姿

東隣人來問

西舍客密期

或者伝以言

或者賒以資

如此歷歲月

志固共不移

吁妾一人身

豈随兩箇兒

決心赴深淵

哀哉其爾為

雜詩 其の二十五

余が郷に一女有り

韶年より 容姿美なり

東隣より 人來り問ひ

西舍より 客密かに期す

或者は 伝ふるに言を以てし

或者は 賒るに資を以てす

此の如くにして 歲月を歴れども

志 固くして 共に移らず

吁くらくは 妾一人の身

豈 兩箇の兒に随はんやと

心を決して 深淵に赴く

哀しい哉 其の爾く為せること

良寛

五言古詩